

01-5 老健入所高齢者の認知機能, 主観的 QOL, 精神機能との関連

○萩原 崇(OT)

医療法人財団愛野会 介護老人保健施設アルカディア 老健リハビリテーション科

Key word : 認知機能, うつ状態, 意欲

【緒言】近年, 認知機能の低下した高齢者に対する介入研究が盛んにおこなわれている。その多くは, 主観的 QOL の改善, 「うつ」症状の軽減, 意欲の向上など, 精神的健康の改善を目的としたものが多い。高齢者の主観的 QOL (モラル: 幸福な老い) の評価は, 現在, 老年期, 医療の分野に広く用いられている。高齢者の「うつ」と認知機能の関連については, 「うつ」と認知症の合併はしばしば認められ, 血管性認知症, アルツハイマー型認知症を呈した高齢者は正常高齢者より高率で並存していると報告がある。

また, 「うつ」と関連する重要な症候として Apathy (意欲低下) があり, Apathy はアルツハイマー型認知症, 血管性認知症に多くみられるが無関心, 病識の欠如といった「うつ」とは異なる症状がみられるという報告もある。

本研究の目的は, 入所高齢者に対する効果的な作業療法プログラムを検討する資料を得るため, 認知機能, 主観的 QOL, 「うつ」, Apathy (意欲低下) と, それらの関連について調査することとした。

【対象】老健アルカディアに2018年4月～12月の間に入所していた高齢者72名(男性13名, 女性59名), 平均年齢は 85.5 ± 7.6 歳であった。なお, 本研究の趣旨に同意が得られなかったもの, 質問紙の文章内容を理解できないもの, 認知機能が高度に低下した MMSE9点以下のものは研究対象から除外した。

【方法】対象者の特性, 評価項目として, 年齢, 性別, 介護度, 入所期間, 面会数, MMSE, PGC-MS, GDS-S-J, Apathy Scale を実施。また, 対人関係の評価として, 「信頼できるスタッフ」, 「仲の良い他入所者」の数について, それぞれ4件法でアンケートを実施した。

【統計学的分析方法】主観的 QOL の関連要因の分析は, 従属変数を PGC-MS, 独立変数をそれ以外の評価項目としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。また, MMSE の結果から対象を高群, 低群の2群に分け, 各評価項目の比較を, 対応のない t 検定で

解析した。なお, 統計学的有意水準は5%とした。

【倫理的配慮】本研究を実施するにあたり, 対象者には研究の同意を得た。

【結果】対象72名のうち, 「うつ」, Apathy のいずれかをみとめたものが41名(56.9%), 「うつ」のみをみとめたものが4名(5.6%), Apathy のみをみとめたものが12名(16.7%)。

「うつ」と Apathy の両方をみとめたものが25名(34.7%)であった。認知機能別では, 「うつ」のみを認めたものが低群2名(3.8%), 高群2名(10.5%), Apathy のみを認めたものが低群10名(18.9%), 高群2名(10.5%), 「うつ」と Apathy の両方を認めたものが, 低群16名(28.6%), 高群9名(56.3%)であった。

解析の結果では, PGC-MS に影響を与えている因子として抽出された評価項目は, GDS-S-J と「信頼できるスタッフ」の数であった。また, MMSE の高群, 低群の両群において, その他の評価項目との比較については有意な差はみられなかった。

【考察】対象者の約半数以上は, 「うつ」, Apathy のどちらかをみとめ, そのうち「うつ」と Apathy の両方を合併している者もみられた。また, 対象の主観的 QOL に「うつ」, 信頼できるスタッフの数が影響している可能性が示唆された。しかし, 対象者の主観的 QOL, 「うつ」, 意欲, 対人関係は認知機能が低くても, 低下はしない可能性が示唆された。

【結語】入所高齢者の半数以上は, 「うつ」もしくは Apathy を呈しており, これらの精神症状の改善を目的とした作業療法プログラムが必要である。その中でも, 特に主観的 QOL の向上を目指すのであれば, 「うつ」症状に焦点を当てたものを選択する必要がある。また, 対象とスタッフとの信頼関係を築けるようなケア, リハビリテーションも主観的 QOL の向上に重要であると考えられる。